

江戸中期の温泉旅行案内 —東京国立博物館蔵古地図より

樽 井 由 紀

〔抄 録〕

東京国立博物館のホームページで公開されている「有馬郡湯本町之図」という絵図には「大日本帝国図書印」「帝国博物館図書」という所蔵印とともに「明治十三年購求」の印記が残っているが、その伝来は明らかでない。筆者は2016年8月にこの絵図を実見し、江戸時代の有馬温泉の絵図の中で従来知られていない絵図であることを確認した。絵図の表は江戸後期の有馬温泉の絵図であり、裏書にも貴重な情報が多く含まれている。そこで、絵図と裏書の内容の初歩的な検討を行ってみたい。

キーワード 有馬温泉、古地図、江戸時代、温泉旅行案内

1. はじめに

東京国立博物館に「有馬郡湯本町之図」という絵図が残る（登録番号 20080268）（図1）。「大日本帝国図書印」「帝国博物館図書」という所蔵印とともに「明治十三年購求」の印記が残っているが、その伝来は明らかでない。絵図は紙本著色の折仕立て、法量は54.1×49.8cm。「摂州有馬湯本町之図」という題箋が付けられている。裏書は絵図とは別に3紙を絵図の裏に貼り合わせたものである。高精細な図版が同館ホームページの古地図データベースで公開されている（URL <http://webarchives.tnm.jp/pages/oldmaps/list02.html>）。

筆者は2016年8月にこの絵図を実見し、江戸時代の有馬温泉の絵図の中で従来知られていない絵図であることを確認した。絵図の表は江戸後期の有馬温泉の絵図であり、裏書にも貴重な情報が多く含まれている。そこで、絵図と裏書の内容の初歩的な検討を行ってみたい。



図1 「有馬郡湯本町之図」（東京国立博物館データベースより）

2. 絵図について

①由来

絵図の右上に、本図の由来が記されている。

元文二巳年大岡春ト図之板行

後年湯本町ヨリ訴訟於／大阪 御番所絶板被／仰付候事

文化庚午年夏写之畢／南氏正会

此図並裏書者予外祖父泉州／中筋邑南権太夫正会主之自／筆記所秘蔵也今偶閱之借獲／其



図2 「摂州有馬細見図独案内」(『日本の古地図』より)

曾孫謄写之畢／嘉永元〈戊〉仲夏日／沢辺兌孝

この題記から、本図は元文2年(1738)に刊行された大岡春卜筆の絵図を、南正会なる人物が文化7年(1810)に写し、これを曾孫の沢辺兌孝なる人物が嘉永元年(1810)に写したものであることが知られる。どちらの人物も現在詳細がわかっていない。

大岡春卜の描いた絵図は、有名な「摂州有馬細見図独案内」(木版着色)である(図2)。この絵図は寛政元年(1789)に単色で再版されている。大阪奉行所の命によって絶版処分となったのは、この再版の絵図かもしれない。とすれば、本図の着色は南正会によって行われた可能

性であろう。幕府によって刊行を禁ぜられた絵図に自筆の裏書を付して秘蔵していたことになる。

②大岡春卜図との違い

本図と大岡春卜の「摂州有馬細見図独案内」の大きな違いは方位の違いである。本図は北が上になっているが、「摂州有馬細見図独案内」は西が上になっている。また、細部に変更や省略、加筆があるように見える。例えば、林溪寺の位置をみると、「摂州有馬細見図独案内」では西端の池ノ坊と川の間に堂宇が描かれるが（図3の左下）、湯本町図では同じ場所に「林溪寺旧地」とあり、堂宇はなくなっている（図4の左下）。一方湯本町図には、温泉寺の北東に「林溪寺」が描かれており（図4の右上）、旧地から移転していることがわかる。『摂津名所図会』（1798）によれば、「林溪寺、有馬町の東にあり。…当寺いにしへは二十坊のうち池之坊の持物たりしが、後世本願寺へ寄付す」とある。「摂州有馬細見図独案内」が林溪寺の移転前、湯本町図が移転後を表すと考えられる。したがって湯本町図は文化庚午年＝文化7年（1810）ごろの状況をかなり反映した絵図となっている。

また、周辺の名所の描き方も異なっている。鳥地獄、有明ノ桜書き込みが川の反対側になっている。（図5）

このように二つの絵図には相当大きな違いがあり、元文2年図の単純な写しではないと考えられる。再版本の段階で変わっていたのか、南正会による改変が行われたかは判断できない。

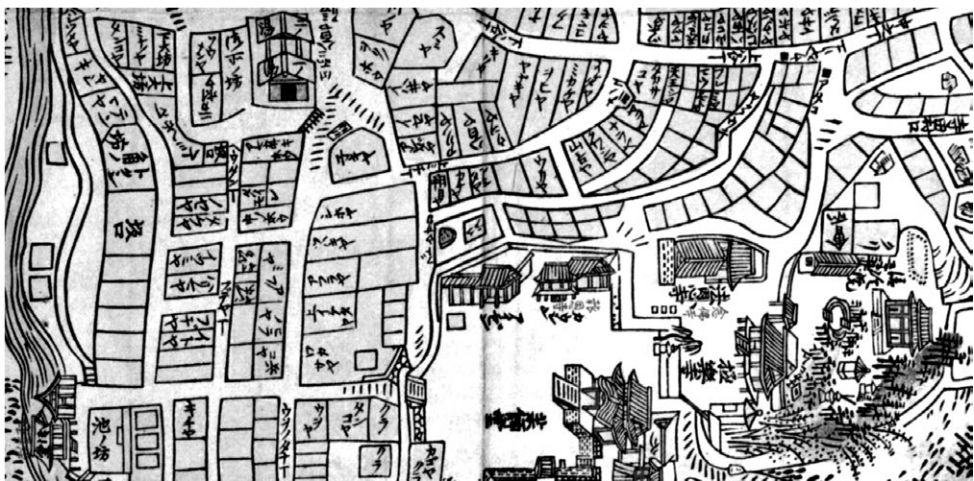


図3 旧林溪寺（『日本の古地図』より筆者作成）



図4 林溪寺(新) (東京国立博物館データベースより筆者作成)



図5

3. 裏書について

①「宿名寄並小湯女名」

裏書きは3紙に分かれ(図6)、上下に貼り付けられた2紙には、「宿名寄並小湯女名」として、一の湯、二の湯それぞれ10坊の坊名と経営者、小湯女名をあげ、続けて小字二段で小宿名と経営者名が書かれている(図7、8)。これを表にまとめたものが表1である。右端に※印を付した個所は、「摂州有馬細見図独案内」の記述と異なるほか、宿の順序も大きく異なっており、このリストが単純な写しではないことがわかる。

②温泉と浴場管理の覚書

絵図の裏面中央の裏書1紙は、真ん中で折り返して裏表に描かれた文章を、紙を広げて貼つけたもので、天地逆向きになっている。上側の1段には、湯本町と町役人の名簿に続けて、



図6 裏書

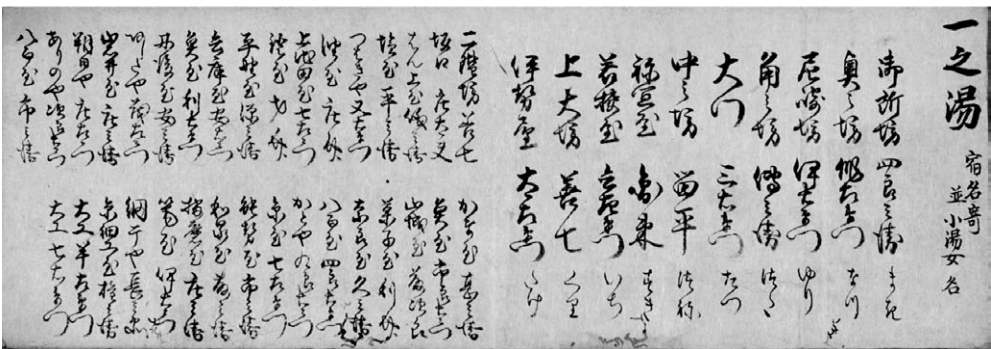


図7 一之湯

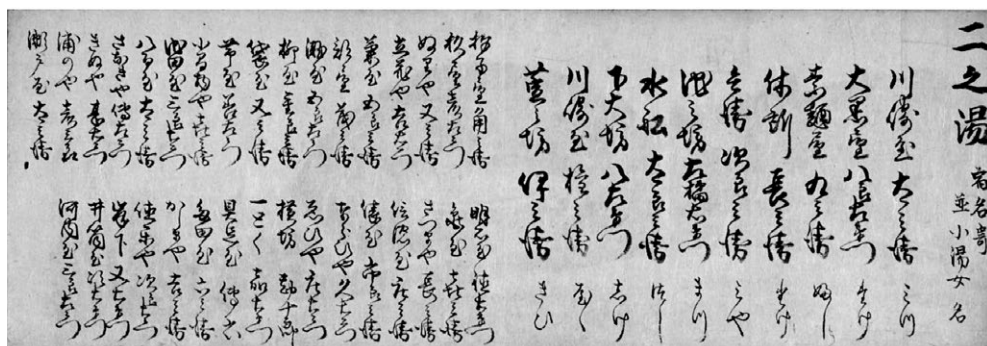


図 8 二之湯

表 1

宿名寄並小湯女名							
一の湯			二の湯				
坊名	経営者	小湯女名	坊名	経営者	小湯女名		
御所坊	四郎兵衛	まき	川崎屋	太兵衛	みつ※		
奥之坊	作左衛門	なつ	大黒屋	八郎左衛門	たけ		
尼崎坊	伊右衛門	ゆり	素麵屋	九兵衛	ふし		
角之坊	伝兵衛	つた	休所	長兵衛	たけ		
大門	三右衛門	たつ ※	兵衛	次郎兵衛	みや		
中之坊	留平	つね	池之坊	左橘右衛門	まつ ※		
祢宜屋	円策	すき	水船	太郎兵衛	つし		
若狭屋	兵左衛門	いち	下大坊	八左衛門	しけ		
上大坊	善七	くり ※	川崎屋	権兵衛	やや		
伊勢屋	太左衛門	たけ	萱之坊	伊兵衛	きひ		
小宿名	経営者	小宿名	経営者	小宿名	経営者	小宿名	経営者
二階坊	善七	かな屋	甚兵衛	杓子屋	角兵衛	明石屋	徳右衛門※
坂口	庄太夫	魚屋	市郎右衛門	杓屋	彦左衛門	亀屋	喜兵衛
はん上や	儀兵衛	山城屋	藤次郎	ぬりや	又兵衛	さつまや	長兵衛
塩屋	平兵衛	菓子屋	利介	立花や	吉右衛門	信濃屋	庄兵衛
つはきや	又右衛門	奈良屋	久兵衛	菊屋	五郎兵衛	俵屋	市郎兵衛
油屋	庄介	八百屋	四郎右衛門	部屋	茂兵衛	ならひや	久右衛門
上池田屋	七左衛門	かとや	九郎右衛門	灘屋	五郎左衛門※	ゑひや	庄右衛門
鎧屋	才介衛	糸屋	七左衛門※	柳屋	重郎兵衛	横坊	勘十郎
平野屋	源兵衛	能勢屋	市兵衛	袋屋	又兵衛	一とく	嘉右衛門※
兵庫屋	安右衛門	和泉屋	藤兵衛	帯屋	善左衛門	具足屋	伝六
魚屋	利右衛門	播磨屋	庄兵衛	小間物や	喜兵衛	多田屋	六兵衛
丹後屋	安兵衛※	筆屋	伊右衛門	池田屋	三郎右衛門	かしまや	吉郎兵衛
あしたや	左衛門	網干や	長兵衛	八百屋	太兵衛	徳楽や	次右衛門
岩井屋	庄兵衛	糸細工屋	権兵衛※	さなきや	伝左衛門	岸下	又右衛門※
朔日や	庄左衛門	大工	半右衛門	きぬや	甚右衛門	井筒屋	治右衛門
ありのや	次郎右衛門	大工	七右衛門※	浦のや	彦三郎	河内屋	三郎左衛門
八百屋	市兵衛			瀬戸屋	太兵衛※		

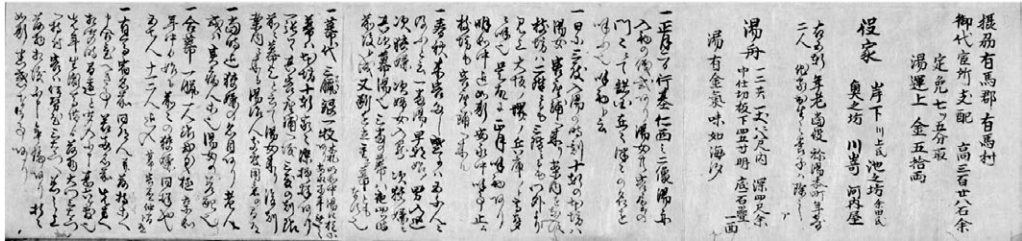


図9 浴場管理

浴場管理の変遷が箇条書きで記される（図9）。湯女の仕事や浴場管理が、江戸後期の明和年間（1764-71）から安永年間（1772-80）にかけて大きく変化していることがわかる。これらは『摂津名所図会』（1798刊）には見られない記述であり、従来知られていなかったことも多い。（拙稿「浮世絵に描かれた有馬の湯女—その装いと仕事の変化について—」『温泉地域研究』第26号、13-24、2016参照）。

摂州有馬郡有馬村／御代官所支配 高三百廿八石余／定免七ツ五分取／湯運上 金五拾兩／役家 岸下〈川上氏〉 池之坊〈余田氏〉／奥之坊 川崎 河内屋／右五軒、年老当役 於湯本町年寄／二人 他家出生之養子ハ除之

湯舟 〈一二共一丈二八尺内 深四尺余 中仕切板下四五寸明 底石畳一面〉／湯有金気、味如海汐

- 一 正月二日、行基仁西之二像、湯舟／入初の儀式あり。湯女共客屋の／門々にて諸国在々津々の名を／呼ふ也。呼初ト云。
- 一 日に三度入湯の時刻、十軒の本坊ハ／湯女客座舗へ来り案内をなす／枝坊ハ二階ニ而も三階ニ而も、門外より／見上、大坂ノ堺ノ兵庫ノト高声／ニ呼也。是故に正月呼初あり／明和申迄如（斯）、安永中呼事止ム／枝坊も客座舗へ来ル
- 一 春秋来客多し 盛ニハ五千人ニ／及ふと云。番湯、早朝始メ男入込、／次狭嫌。次婦女入籠。次狭嫌ヒ。／其次幕湯也。三番の幕ハ夜四ツ時／前後ト成、又断を立重ね幕とも／なす也。
- 一 幕代三臘（マハリ）銀一枚〈木札、明和申湯口柱にあり。安永子年無之〉／幕ハ本坊十軒家々染模様あり。（安永9 庚子=1780）／一張ツ其客座舗へ渡三度の刻限／前ニ幕上と云て湯女来り後刻／案内ニ来る。湯治人支度用意の間有。
- 一 当時迄狭嫌の名目あり。老人／或ハ重病人等也。湯女の差配也。
- 一 合幕、一臘一人銀式匁極。享和／年中より始る。前々の狭嫌同様也。（享和=1801-03）／五七人十一二人迄入。〈幕客屋仲間ト有〉

一 有馬宿名前同道人併荷持等へ／申合置へき事、若兩名前先方へ／相聞時間違と聞入不申甚六ヶ敷也／先年生瀬馬借より荷物大門三右衛門／へ持付、客は伊勢屋三右衛門へ着之上／荷物相渡不申争論あり、折々／如斯迷惑なる事あり

裏書中央の下段には、各地への距離、街道整備の記録などが記されている（図10）。天明2年（1782）、寛政年間（1789-1800）、文化6年（1809）といった紀年が見えるが、最も新しい文化6年は、南正会が本図を作った前年にあたる。

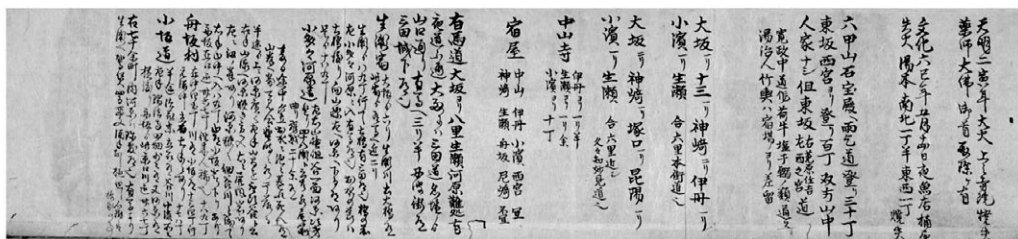


図10 里程など

天明二寅年大火。上之寺院焼失、／薬師大仏御首取除ケ有

文化六巳年五月十四日夜、魚店桶屋／失火、湯本南北一丁半、東西一丁焼失

六甲山石宝殿へ雨乞道登り三十丁／東坂西宮ヨリ登り百丁、双方山中／人家ナシ但東坂〈右菟
原住吉、左西之宮〉道

〈寛政中道作、荷牛塩干鰯ノ類通ス。湯治人竹輿ハ宿場ヨリ差留〉

大坂〈一リ〉 十三〈一リ〉 神崎〈二リ〉 伊丹〈一リ〉

小浜〈一リ〉生瀬　〈合六里。本街道也〉

大阪〈二リ〉 神崎〈一リ〉 塚口〈一リ〉 昆陽〈一リ〉

小浜〈一リ〉生瀬　〈合六里近シ。／久々知妙見道也〉

中山寺〈伊丹ヨリーリ半、／生瀬ヨリーリ余、／小浜ヨリー十丁〉

宿屋〈中山、伊丹、小浜、西宮、宜。／神崎、生瀬、舟坂、尼崎、不宜〉

有馬道 大阪ヨリ八里、生瀬河原難処有。夜道不通。大雨には三国道名塩ヨリ山口通り、有馬へ三リ半。丹波街道／三田城下道也。

生瀬宿 大坂より六リ、生瀬川土大橋有。／此宿より有馬へ近ニリ 生瀬より八九丁行て土橋有。三田道也。橋の前左小多々河原ニ入。有馬道也。出水の節ハ土橋渡り向山際左へ河原へ下る道あり。是ヨリ十八九丁

小多々河原道〈左右山陰岨、谷一面河原、次第登り四十八瀬ト共。水尾筋曲リ飛越二十余有〉

夏日途中夕立出水ニ泡ニ巻れ死人有。山岸へ寄て見合暫時ニ水干落る

半途より上ミ河原広く、左手山間を座頭谷云。右手山添へ河原狭き方へ右ニ屏風岩あり。左に劔の峯あり。河原狭く細谷川と成て右手山中へ入、八九丁山道、小坂登り下りあり 舟坂在口迄卅六七丁、往来人稀也。十八九丁〉

舟坂村〈在中四五丁、川有。小坂道十三四丁行 元禄中立石右手にあり。十七八丁〉

小坂道〈半途法花宗立石有谷川中流所々 右手端法寺田畑少々有。又河原有。横渡り舟坂より此京口川迄卅六七丁〉

右七十余町内河原ハ珎敷道也。有馬より生瀬へ駕賃四百廿四文、酒手なし極、但し心附けは格別の事

ま と め

本稿では東京国立博物館のホームページの古地図データベースで公開されている「有馬郡湯本町之図」という絵図と裏書について検討した。「有馬郡湯本町之図」は「摂州有馬細見図独案内」を描いた大岡春卜の図を写したものとされているが、両図には大きな相違があり、単純な写しではない。絵図の由来はさらに詳細な検討が必要である。

裏書は先行する地誌や絵図の抜書きと思われる個所だけでなく、有馬温泉の浴場管理の変遷に関する記述は他書に見えないことが多い。これらの記述が何に基づくのかも、今後細かく検討する必要がある。いずれにせよ、本図の作成年代と裏書の記述が接近していることから見て、本図の作成者である南正会は、文化6年から7年にかけて有馬温泉を実際に訪れ、本図の元になる絵図と裏書の記述の材料を手に入れたのではないかと推測することが可能である。暫定的な検討結果として記しておきたい。

本稿で紹介した「有馬郡湯本町之図」は、由来に不明な点が多いとしても、有馬温泉の歴史的な史料として十分に価値があると思われる。本稿が今後の詳細な検討と活発な議論に資することができれば幸いである。

〔参考文献〕

秋里離籬島（1798）『摂津名所図会』巻9

小澤清躬（1938）『有馬温泉史話』五典書院

風早恂（1988）『有馬温泉史料』下巻 名著出版

神戸市立博物館『特別展 有馬の名宝 —蘇生と遊興の文化—』1998

樽井由紀「浮世絵に描かれた有馬の湯女—その装いと仕事の変化について—」『温泉地域研究』第26号、13-24、2016

南波松太郎編 『日本の古地図』創元社 1969

（たるい ゆき 非常勤講師）

2017年11月15日受理